

# アジア・アラブと日本の交流史

アハマド ラハミー

## THE HISTORY OF COMMUNICATIONS BETWEEN ASIAN ARAB COUNTRIES AND JAPAN

AHMED RAHMY

アラブ世界は、西のモロッコから東のイラクまで広がっていて、22 か国を含んでいる。それもアフリカやアジアに跨っている形になっている。アジアに存在するアラブ諸国は、エジプトのシナイ半島をはじめ、サウジアラビア、イラク、ヨルダン、シリア、パレスチナ、レバノン、イエメン、オマーン、アラブ首長国連邦、バーレーン、カタールの11 か国に及ぶ。

アラブで日本というと、まず浮かんでくるイメージは、芸者・着物・侍・忍者などである。一方、日本人がアラブといえはすぐに思い浮かべるのは、ラクダ・砂漠・四人妻・豚肉を食べないことなどである。

日本人のアラブに対する一般の関心が非常に低いということは事実である。日本のテレビのニュースや新聞でも、通常、アラブのことを取り上げたものはほとんどと言っていいほど見当たらない。ところが、何か大きな事件がおきると、テレビがその事件のことを大げさに報道してしまう。これでは日本人がアラブ・イスラム世界についてマイナスのイメージを抱いても仕方がない。

1862年に、文久遣欧使節団（ふみひさけんおうしせつだん）は西洋文明全般にわたる調査研究のためヨーロッパに派遣された。使節団は計36人で品川を出発してヨーロッパを目指した。一行はイギリス政府のフリゲート艦「オーティン」号で品川からスエズまで行き、陸路でカイロを経由してアレクサンドリアまで向かいました。この使節団がピラミッドのスフィンクスの前で集合写真を撮っている。

アラブ・イスラム世界における日本社会の紹介と認識が日本でのそれよりやや遅れて始まったのである。昔は、日本はシナの一部で、アラビア語で“ワークワーク”と呼ばれる黄金がとれる極東の小さな島というイメージであった。しかし、近代アラブの日本認識に大きな影響を与えたのは、日露戦争での日本の勝利が挙げられる。日露戦争の日本の勝利によって日本に対するアラブの関心が一気に高まった。当時エジプトに生まれたたくさんの子供に“東郷”という名前がつけられたほどである。こうしてアラブの人々は憧れと尊敬の目で日本を見るようになり、そのプラスイメージが定着するに至ったのである。日露戦争直後のアラブ・イスラム世界では、西欧列強による植民地政策がはじまっていた。その代表的な例として、1882年から始まったイギリスによるエジプトの占領が挙げられる。イギリスの支配下に置かれたアラブの数多くの民俗解放運動の指導者たちは、西欧列強の仲間であるロシアを破った日本を模範にすることによって、祖国の独立を図ろうとしたのである。

その後、日本に対してさらに関心を高めたのは、第二次世界大戦中の真珠湾攻撃と神風特攻隊の戦いぶりである。もちろん、その戦争の末期におきた長崎や広島に対する原爆投下は

アラブ人の日本人に対する同情の念を引き起こした。

まず、20世紀初めにエジプトの民族運動の指導者ムスタファ・カーメルが日本の躍進ぶりを教訓とし、『昇る太陽』（アルシャムス・アルムシュレカ）という日本を紹介する本を1904年に発表した。ムスタファ・カーメルのこの著作は当時の知識人ではなく、一般大衆の間でもたいへん人気があった。そこで数多くのエジプト人やアラブ人は日本に憧れるようになった。

その次に、“ナイル川の詩人”と呼ばれた当時のエジプト人詩人のハーフィズ・イブラヒムは、日本による日露戦争の勝利を褒め称える詩を作った。タイトルは“日本の乙女”、アラビア語で“ガーダト・アルヤーバーン”であった。この詩は母親時代、つまり半世紀前まで多くのエジプト人知識人が丸暗記していた。当時、国語の教科書に載っていたからである。この詩の冒頭は次のようである。

砲火飛び散る戦いの最中にて、  
傷つきし兵士たちを看護せんと若き日本の乙女たち働きけり、  
牝鹿にも似て美しき汝れ、危うきかな！いくさの庭に死の影満てるを、  
われは日本の乙女、傷病兵に尽くすは我が務め、  
ミカドは祖国の勝利のため、死をさえ教えたまわりき。  
ミカドによりて祖国は大国となり、西の国々にも目を見張りたり。  
我が民こぞりて力を合わせ、世界の雄国たらんと力尽くすなり  
アラビア語ではこう言っている。

أنا يابانية لا أنتني عن مرادى أو أدوق العطبنا

أنا ان لم أحسن الحرب ولم تستطع كفاى تغليب الظبا

أخدم الجرحى وأفضى حفهم وأواسي فى الوغى من نكبا

هكذا الميكادو قد علمنا أن نرى الأوطان أما وأبا

さらに、イラクでは詩人のマアルーフ・ラサーフィーは当時、「対馬沖海戦」という詩を書いたし、レバノンのアミール・ナセルという詩人もまた「日本人とその恋人」という詩を発表している。

アラブにおける日本認識に大きな影響を与えた二つ目の出来事は、1923年の関東大震災である。先ほど取り上げた“日本の乙女”という作品を通じて日本への親しみと憧れがすでに出来上がっていたため、関東大震災のニュースがアラブ世界で流れた際の人々の衝撃や悲しみは深かった。そこでエジプトの詩人アハマド・シャウキーが『日本の地震』というタイトルの詩でその出来事に対するアラブ人の気持ちを表した。

その後、エジプトの代表劇作家アルハキームは『洞窟の人々』という戯曲を作り、その中で日本の浦島伝説からモチーフを得たのである。この作品はアレゴリーを含んだもので、つまりイギリスの支配からエジプトの独立を願うという切実な思いが込められていた。

日本とアラブ・イスラム世界のかかわり方と西洋とアラブのそれを比較した場合、西洋とアラブの長い交流の間に戦争や憎しみが幾度もあったことがわかる。8世紀には、アラブ人

がイベリア半島を植民地にした。そのことを恨みに思った西洋人が十字軍遠征の形で復讐をしようとしたと思われる。そこから両者間の敵対関係が生まれ、その後19世紀における西欧列強のアラブ・イスラム世界に対する植民地政策によって両者間の溝が深まっていった。一方、日本とアラブとの交流は19世紀半ば頃までほとんどなかったもので、西洋のように真正面からぶつかるようなことがなかった。そのため、敵対感がなく、かえって憧れの対象であった。そこで、西洋の支配から独立することを願おうとする際に、常に日本のことをモデルにして民族運動の指導者が国民の奮闘精神を促そうとした。

1926年に日本政府がアレキサンドリアに総領事館を開設し、その後すぐにカイロにも大使館を開いた。

太平洋戦争のはじめ頃に、マレー沖で日本海軍がイギリスの軍艦プリンス・オブ・ウェールズやレパレスを攻撃し沈めた報道を受けたエジプト人はカイロなどの大都市でそれを喜んでデモ行進をした。その翌日にイギリス大使館がそうしたデモ行進に対して当時のエジプト政府に抗議をした。当時エジプトや他のアラブ諸国はイギリスやフランスの支配下に置かれながら、独立の夢を見ていた。そのため、第二次世界大戦が勃発したときに、イギリスの支配下で苦しむエジプト人の数多くの知識人にとって、日本の勝利への期待はきわめて大きかった。日本を含む枢軸国がイギリスを含む同盟諸国を破れば、祖国の独立につながるという見方をするアラブの民族運動の指導者も少なくなかった。そのため、戦争中アラブ人の視線は日本に向けられていたし、戦争に関する報道を受けながら日本の動きを見守っていたのである。そのことから日本への興味が深くなったことは言うまでもない事実である。日本がイギリスを破れば、自分たちの解放につながる。それがきっかけで、日本はどんな国であるかとか、日本人のライフスタイルやものの考え方に興味をもつようになった。それに答えるような形でいくつかの雑誌の編集者が日本に関する記事を載せたりした。たとえば、日本の天皇制に関する紹介記事が出され、日本の着物や日本の食文化を紹介する記事もあった。

このようにイギリスの支配下に置かれて独立を願うエジプト国民から日本に寄せられる期待は非常に大きいものであった。そのため、日本の敗戦に対する衝撃は大変大きかった。特に原爆投下による長崎と広島の大惨劇はアラブ・イスラム世界に甚だ大きな衝撃を与えてしまった。

当時、アラブ・イスラム世界の新聞や雑誌は日本の敗戦に関するニュースであふれていた。たとえば、1946年5月26日の日付けの“ムサマラト”という雑誌に、日本の敗戦についてあるルポルタージュが載っていた。ルポルタージュのタイトルは“日本はなぜ負けたか”というのであったが、日本海軍の野村大将とのインタビューがアラビアで紹介されていた。また同年10月20日に、同じ雑誌の文面に、占領下の日本社会の状況について記事が載っていた。

1952年7月にエジプトのナギーブ将軍が革命を起こし、ファルーク国王政権を倒した。同じ年の11月にエジプトは日本と国交回復を果たし、同じ年の12月にカイロにおける日本公使館を開設した。1953年4月には公使館を大使館に昇格させた。その後、1960年代になると日本の高度経済成長とともに、日本の製品が進出し高い評価を得るようになった。アラブ・イスラエル紛争が激化するとともに、イスラエルを全面的にバックアップしている欧米諸

国の製品をボイコットしていたアラブ諸国は、高い評価を受けていた日本製品をどんどん受け入れた。日本製品は非常に性能がよくて、長持ちするのでアラブ人の間で異常な人気を得、他の西欧製品のことを信用しないような傾向があった。2000年には、トヨタ自動車がカイロ郊外で組み立て工場ができたし、2005年にも日産自動車の組み立て工場がカイロにできた。

一方、日本とサウジアラビアの関係についてであるが、1909年には山岡光太郎という人が最初の日本人イスラム教徒として聖地メッカの巡礼を行った。日本とサウジアラビアとの最初の公式な接触は1938年であった。そのときは、サウジアラビアの駐英公使であったハフィズ・ワハバが東京の代々木モスクのオープニング式典のために日本を訪れた。1953年には日本はサウジアラビアに経済使節団を派遣し、1955年にはサウジアラビアとの国交樹立が果たされた。1971年に、当時のサウジアラビア国王ファイサルが日本を公式訪問をした。1981年には、当時の日本皇太子明仁（現在の天皇）と美智子妃殿下がサウジアラビアを公式訪問をした。2003年には当時の日本総理大臣小泉純一郎がサウジアラビアを訪問し、日本とサウジアラビアとエジプト三カ国で「日アラブ対話フォーラム」が設立された。2011年3月に起きた東日本大震災のときに、サウジアラビア政府が日本に2千万ドル相当の液化石油ガスを提供した。2017年3月には、サウジアラビアのサルマン国王が訪日した。これが、サウジアラビア国王の訪日としては30年ぶりの出来事であった。サウジアラビアは日本にとって最大の原油供給国となっている。

一方、日本とイラクの関係であるが、正式に国交が樹立したのは1939年のことである。しかし、1941年にイギリスがイラクを占領したことによりイラクが連合国の側に立ち、枢軸国の一員だった日本とは国交断行をしてしまった。1955年のサンフランシスコ講和条約の後、両国の国交が回復した。しかし、1990年8月のイラク軍によるクウェート侵略の際、日本は国連安保理決議661を通じてイラクを制裁し、事実上の国交断絶となった。2003年3月20日、アメリカ軍を中心とした有志連合がイラクを侵攻した。同年12月に、自衛隊がイラク南部のサマワ地方に派遣され、復興支援活動に当たった。2004年6月には、イラク暫定政権が発足したことを受け、日本と国交が12年ぶりに回復した。イラクから日本への輸出品目はもっぱら原油で、一日当たり約6万バーレルが日本へ輸出されている。

1957年にエジプトと日本との文化交流協定が結ばれた。それによって両国間の人物交流が活発化した。1960年代にはカイロ郊外のヘルワン地区では日本庭園ができた。現在でもその庭園が残っていて、小学生は必ずそこへピクニックに行ったりする有名なスポットになっている。

1963年に、日本とエジプトの共同作品として日活映画で石原裕次郎と芦川いづみ主演の“アラブの嵐”という映画が日本で上映される。ここで出ている石原裕次郎はどちらかというと内弁慶なボンボン役で、無理やり海外に飛び、無謀な旅行をするという筋立てである。石原裕次郎は祖父の遺言で日本を飛び立つ。エジプト行きの旅客機の中で行方不明になった両親を探す芦川いづみと出会う。やがてエジプトに降り立った二人は独立運動に巻き込まれる。ピラミッドをバックに石原裕次郎がロバにまたがるシーンもあった。エジプト現地ではエジプト人女優の“シャディヤ”に出会い、そしてそこで冒険がはじまる。

1972年に、東京都知事小池百合子がエジプト留学をし、同年カイロ大学文学部社会学科に入学、1976年に同学部同学科を“良”の成績で卒業する。以来、日本とエジプトの架け橋の役割を果たす。

1970年代になると、エジプトにおける日本認識が具体的なものになった。1972年に、エジプトの首都カイロで国際交流基金のオフィスが設けられた。そして1974年の秋には、カイロ大学文学部に日本語・日本文学科ができた。それがアラブ諸国初の日本語学科であり、その後のエジプトを含むアラブ地域における日本認識と日本研究に大きな影響を与えた出来事の一つになった。1978年に第一期生が卒業し、優秀な学生が日本文部省から奨学金をもらい、日本の大学院に進学し学位を修得してエジプトに帰った。帰国後、彼らは同学科の教員を勤め大きな役割を果たしている。毎年20人ずつが卒業し、日本とエジプトの架け橋となって相互理解を深めるのに貢献している。たとえば、1970年代後半からはじまった日本人観光客のエジプトへの団体ツアーの通訳などがあげられる。それ以外にも日本語学科の現地スタッフによる一般人向けの日本文化紹介と日本文学作品のアラビア語への翻訳もあげられる。なかでは、『源氏物語』、『落窪物語』、『義経記』などのアラビア語訳が挙げられる。そのおかげで、数多くのアラブ人が日本文学の優れた作品を知ることができたとし、違った目で日本を眺めるようになったと言える。1990年代後半になると、日本語を習おうとするエジプト人の数が増えたので、2001年にカイロ大学に次ぐ20万人の学生を抱える国立大学のアイン・シャムス大学にも新しい日本語学科が開かれた。

現在でも日本に興味を持って日本語を習いたいというアラブ人学習者の人数が増えつつある。そのことはエジプトに限ったことではなく、サウジ・アラビアやシリアやスーダンなどでは日本語学科が次々にできたのである。サウジ・アラビアの場合はキング・サウド大学、シリアの場合はダマスカス大学である。このように、いくつかのアラブの国で新しく設置された日本語学科で数多くのアラブ人の大学生が日本語を学び、日本語がしゃべれるアラブ人も前のように珍しくなくなった。それによって両者間の相互理解が深まるようになったことは言うまでもない事実である。

在カイロ日本大使館文化センターもエジプトにおける日本文化の紹介と日本語の普及に大きな役割を果たしてきた。一般人向けの日本語講座を定期的に行い、そこで様々な分野で働く専門家や社会人及び大学生などが日本語を学ぶことができるようになったのである。しかも、日本文化紹介の一つの活動として、毎週水曜日に日本で大ヒットしたアラビア語字幕スーパーの映画を紹介するという企画がある。上映された映画の中で、山田洋二監督の『男はつらいよ』の映画シリーズが挙げられる。

1983年にムバラク元大統領が国賓として、エジプトの国家元首としては初めて訪日したが、このことによって両国の関係いっそう緊密なものとなった。両国の間には、ムバラク元大統領訪日の際に合意された合同委員会が設置され、国際情勢、二国関係全般に関する意見交換の場が設けられるようになった。同委員会とは別に、国会議員をはじめとして両国要人の往来が活発に行われ、様々なレベルでの意見交換が行われた。

ムバラク元大統領が日本を訪れ、日本への関心が徐々に高まるようになったことと並行して、日本がエジプトに重点的な経済援助をあたえるようになり、無償供与で小児科病院を建設し

た。その病院はカイロ市民の間では評判がよく、カイロ郊外や地方の人々までわざわざカイロまで出向いて病気になった我が子をその病院の医師に診てもらったりしている。この病院にはアラビア語の名がついているにも関わらず、誰もその名前を呼ばず、“日本の病院”という呼び方で知られるようになった。

1963年、エジプト人高校教師のアリー・サムニー先生がエジプト政府に抜擢（ばってき）されて、四年間の任務でアラビア語を教えに日本に派遣された。サムニー先生はそのときアラビア古代詩をテーマに修士号を取得した。日本では博士号を取るための勉強を続けた。サムニー先生はエジプトに妻と八人の子供を置いて単身赴任で東京に赴いた。しかし赴任して一年も経たないうちに妻は他界してしまった。サムニー先生の東京滞在の間、当時渋谷にあったイスラム教のモスクでは金曜日の礼拝の前の説教を毎週するようになった。サムニー先生は自分の四年間の任務を終えてエジプトに戻ったが、当時の日本文部省からの特別なリクエストに応じて再びサムニー先生は日本に呼び戻された。二三年経つとサムニー先生は日本人イスラム教徒の女性と結婚し、二人の娘が生まれた。こうしてサムニー先生は東京外大で教鞭をとりアラビア語を1980年代前半頃まで20年にわたって教え続けた。エジプトに帰って一年も経たないうちにサムニー先生は日本の天皇勲章を受けた。こうしてサムニー先生はアラブ世界と日本との懸け橋役をつとめ、1999年に他界した。

1984年8月、ロスアンゼルス・オリンピックでエジプトのラシュワン選手と日本の山下選手のあの有名な無差別級決勝戦の試合が行われた。ラシュワン選手は相手の山下選手の負傷していた右足を攻めなかった。結果的にラシュワン選手は金メダルを獲得しなかった。表彰台に上るときも、ラシュワン選手は山下選手に手を貸した。この行動が絶賛されて、この年のユネスコ・フェアプレー賞をラシュワン選手が受賞した。山下の怪我でラシュワンの金メダルを期待していたエジプト・オリンピック委員会やエジプト柔道連盟の幹部らは、「山下と同じ日本の指導者からわざと負けるように指示されたんだろう」とラシュワンを非難するも、翌日にマスコミがラシュワンをフェアプレーの体現者として賞賛する態度に変わり、「お前はアラブの誇りだ」と逆に持ち上げるようになった。ラシュワン選手は引退後、国際柔道審判員となり、2008年北京オリンピックにも参加した。ラシュワン選手のフェアプレーのおかげで、日本におけるエジプトのイメージが高く評価された。

2012年には、エジプト出身の相撲力士“大砂嵐”が初土壌を踏んだ。アフリカやイスラム世界から初めての相撲力士として誕生する。1992年生まれの大砂嵐は11歳になったとき、カイロ市内のボディビルジムに通っていた。そのときから本人は相撲に対して興味を抱き始めた。2008年にエジプト国内の相撲無差別級王者、及び世界ジュニア選手権で無差別級3位となり、2011年の世界ジュニア選手権でも重量級で三位となった。カイロ大学で会計学や経営学を学んでいたものの、相撲への情熱を捨てきれず、エジプト革命が起きた2011年8月に休学して来日した。7部屋目で大竜忠博（たいりゅう・ただひろ）の部屋へ入門決定。大竜親方は「宗教とか外国人とかは関係ない。一人の青年として見ているうちに最近の若者に見られなくなった熱いものがあつた」と語っている。そして2012年3月に大阪場所に初土壌を踏んだ。同年5月場所では7戦全勝で序の口優勝した。元来、大砂嵐は叱られるとなぜそうしたか説明ばかりするので、初めは大竜は「口答えするな」とさらに何度も叱る

ことが多かったが、エジプト人はすぐにはあやまらず、まず自分の行動を説明するらしいと後で知り、大竜は文化の違いを理解したという。2013年5月の場所では7戦全勝の幕下優勝を果たし、7月場所には十両に昇進することが発表された。大竜部屋では現親方となって以来初めての関取である。2018年3月に引退した。引退後はすでに断髪していて、日本のテレビ・チャンネルでタレントとして出演している。

1980年代に、日本政府の援助協力によって、カイロでは新しいオペラハウスが建設された。オープニング・セレモニーに際して日本の花火がはじめてカイロの空に打ち上げられたし、岩崎宏美がギザのピラミッドやスフィンクスをバックにオープン・ステージで日本の歌を披露した。

1998年10月に、日本政府が協力を続けてきたスエズ運河友好の架橋が開通した。橋梁は総延長9KMで4車線を確保している。運河水面から桁下までの高さは、航行船舶を考慮して70メートルと世界最大級。架橋工事は日本側が60パーセント、エジプト側が40パーセントを担当し、1998年に着工していた。

1980年代後半には、エジプトの国営テレビで放送されたNHKの大河ドラマ“おしん”がなぜかエジプト人の間で大人気を得たのである。放送時間になると、子供から大人まで家族全員が集まり、テレビ画面の前で釘づけになっていた。その頃、女の子の子供に恵まれた家族の一部はその子にオシンという名前をつけたりした。“おしん”がエジプトで放送された1990年代は正にエジプトでは日本ブームが巻き起こった。そのブームのおかげで、日本語を勉強しようとするエジプト人の数が増えてきた。“おしん”の放送をきっかけに、対日関心が高まり、様々な日本紹介記事やニュースが取り上げられるようになった。“おしん”のおかげで、エジプト人に与えられた日本のイメージはまたになったため、戦前から出来上がっていた日本への“片思い”をいっそう強いものにしたと言える。

“おしん”以外に大きな役割を果たしてきたテレビ番組といえば、日本のアニメがあげられる。1990年代にエジプトや他のアラブ諸国では「キャプテンつばさ」というサッカー・アニメが放送された。もちろんそのアニメにはアラビア語の吹き替えがついていた。このアニメのアラビア語のタイトルは「キャプテン・マージッド」であった。このアニメを通してアラブの子供たちは日本の学校の仕組みや日本社会の人間関係を垣間見ることができたと言えよう。

戦前におけるアラブ・イスラム研究は、当時日本の戦略的また経済的政策と深いかわりを持って現れた。その中で大川周明の活躍が挙げられる。しかし、太平洋戦争の日本の敗北でこの研究活動は大きな打撃を受けた。

戦後日本史におけるアラブ・イスラム研究の動向を、三つの転換期に分けて考えたい。

まず戦後日本史における最初の転換期は1950年前後に現れ、その時期における日本人の国家目標は産業貿易立国であったため、アラブ地域との関係がその目標に沿って再開されるようになった。その政策の中では、当時アラブ地域で次々と現れた民族運動はむしろ日本の目標を実現するのに不安定要因と見られ、日本の産業貿易立国にとって阻害要因とみられる傾向があった。そこでは、常にアラブ世界での政治社会的変動への警戒が必要だった。このようなアラブ世界における激しい変動とそれに伴う経済的重要性の増大は戦後日本における

調査研究機関設立の最初の引き金となった。こうして中東調査会、アジア経済研究所、ジェットロなどの研究所が新設され、それに政府財界の積極的な参加も見られるようになった。中東調査会は日本外務省によって1956年に新設され、中東地域における政治的な諸問題を取り上げて分析した。アジア経済研究所は1958年に通産省によって設立され、東アジアおよび中東地域並びに発展途上国の経済的な諸問題に注目した。

しかしこの時期のアラブ・イスラム研究においては、個人的な努力が何よりも活発でこの時期の特殊な色合いを定める一つの明白なファクターであった。つまり、戦前期におけるアラブ研究への投資が収穫につながり、現地留学および大阪外国語学校でアラビア語を身につけた人たちが何らかの形でそれらの研究に貢献するようになった。そして敗戦とともに解体された諸研究所に所属していた何人かのアラビア語の研究者が引き続きアラビア語の研究に努め、各地の大学のスタッフとなって行った。

たとえば、南満州鉄道会社によって設立された回教圏研究所に所属していた前嶋信次氏が慶応大学のスタッフになった。彼はイスラム史の先駆者として知られるが、同大学にイスラム史研究科を設立し、いくつかの作品をアラビア語の原文から日本語に直訳した。彼によって出版されたアラビアンナイト（千夜一夜物語）の日本語版は日本でのアラブ認識およびアラブ世界のイメージの定着に大きな影響を与えた。その後、彼によってアラブの地理学者イブヌ・バットウータの旅行日記およびアラブの中世時代の詩人アルジャーヒズの詩集の日本語版が刊行された。同じく慶応大学の井筒俊彦（いづつ・としひこ）氏がイスラム思想に注目し、1957年にアラビア語原文からの直訳の日本語版のコーランを三巻本で日本に紹介した。そして彼の次の作品である“コーランにおける神と人間”が長年にわたって、その分野のユニークな参考文献として知られるようになった。

日本の戦後時代における第二の転換期は1960年前後であった。1960年代になるとアラブ地域における民族運動と社会主義政策が活発に行われ、イギリスやフランスの統治下に置かれていたアラブ諸国が次々と独立への道を進んでいった。その民族運動の主導権を握って国民を引っ張っていたアラブ主導者の多くが軍隊出身の人たちであったので、彼らに対して欧米諸国が根強い不信と不安を抱くようになった。また、当時アラブ諸国に対する日本の政策姿勢もそれによって大きく左右されるようになった。

しかし、この時期における現代アラブ研究および調査は1950年代と比較して質・量ともに大きく前進した。それにしてもアラブ地域で次々現れた政治的、社会的不安定および諸問題に対する危機意識は以前とはほとんど変わらず薄いものでしかなかった。

日本国内においては、敗戦直後の混乱が徐々に収まり、1952年4月の独立と共に新しい時代を迎え始めた。敗戦国の日本は経済的な“離陸”をはじめた。そしてその数年後1960年代に日本の産業ブームが起り、それに伴ってアラブ諸国が日本にとって大切な燃料資源地域であると改めて認識されるようになったが、政治的な側面において、日本はできるだけ地域で起こっている諸事件に首を突っ込まないで、継続して一歩引いた付き合いをするような方式をとった。

1961年に、東京外国語大学にはアラビア語・アラブ文学科が新設された。それと同時に、大阪外国語大学のセム語学科の一科目だったアラビア語が独立してアラビア語学科が誕生し



た。さらに、東海大学、天理大学、早稲田大学、慶應大学と拓殖大学などでアラビア語の講座が次々と設けられた。

こうして日本におけるアラブ・イスラム研究が再び新しいブームを迎えた。日本の文部省、通産省、外務省ならびに日本全国の企業の関係者がアラブ情勢の研究にかかわっている諸研究所および調査プロジェクトのために財政上の資金を備え始めた。

戦後日本のアラブ研究における第三の転換期は1970年代初頭から始まった。それまでは遠い存在の地域でしかなく、そこでの出来事が“他人事”だと思われてきた諸問題が一気に身近な問題として意識されるようになったのである。1973年10月の第四次中東戦争とそれに伴った石油危機の際に、アラブの指導者が石油問題と中東の和平問題とをリンクさせた形で日本を含む先進国に対するアラブ政策、アラブ認識の透明さを迫ったのである。日本における石油危機のインパクトは他の先進国よりもはるかに深刻な問題であった。当時発表された経済開発協力機構（OECD）のレポートによると、日本で使用される資源のほとんどが海外からのものであり、特に石油の場合は他の先進国より、アラブからの石油に依存するところが大きいということが述べられている。当然の結果として第一次石油危機が日本の対アラブ政策に大きな修正をもたらすきっかけとなったし、アラブ・イスラエルの衝突に対する日本の政治的な姿勢を変えることになった。日本外交および企業関係者の中に、西洋のレンズを通してアラブを眺めるという姿勢ではなく、相対的に独自の路線を目指す集団が形成されるようになった。そしてその時期に初めて石油問題と政治問題の一体化というアラブ問題の認識が定着した。つまり日本の経済的安全保障は中東和平と切り離して考えることができないうとする姿勢である。

この時期になると日本はすでに産業貿易立国という目的を果たし、国際社会で対外援助、協力、対外投資を行う経済大国として、位置づけられるようになった。アラブ地域に関して、石油危機は政策上の意思表示を日本の利害の観点からと同時に、国際社会における大国の観点から提出することを要求する意味ももっていた。対アラブ認識における経済と政治問題の一体化認識の中で生まれた新しい政策は主に二つの特徴ももっていた。まずこれまでと違って、日本の文化的、社会的背景に合うような日本独自のアラブ政策を実施するということが、常に中東での政治的問題を重視するというもので、対外経済政策の重点を湾岸産油国、北アフリカ産油国そしてエジプトに絞るという特徴である。その結果として、アラブ世界に対する新しい接近法は、以前のように日本政府および民間企業に限られたことではなくなった。一般庶民もまたアラブ情勢に関心を抱き始めるようになったし、日本の大学のアラビア語学科を志願する学生数も増えつつあった。それに伴って日本中の出版社がアラブ現代史および文学、地理、社会などに関する多くの著書を出版するに至った。

第一次石油危機から第二次石油危機までの間、日本政府並びに民間企業に中東の情報を提供すべく60年代に設立された研究所の他に同じ目的のためにたくさんの研究所が新設された。たとえば中東協力センター、中東経済研究所はその良い例であり、対外経済政策の実務に直結するような機関の新設もあった。

この時期に現れたアラブ関係の研究者は三つの種類に分けることができる。まず西洋においてアラビア語およびアラブ文学の研鑽（けんさん）を積んだ人たちであるが、彼らは西洋

のアラブ研究の影響を受けながら、現代アラブ・ムスリム社会におけるネイティブの学者の研究を無視していたのである。

二つ目は西洋の東洋アラブ学者の研究ならびに現代アラブネイティブの研究者の研究に頼らず、日本独自のイスラム研究法を求めた人たちである。彼らはアラビア語原文の資料を取り上げるように努めながら、日本人独自の発想法や文化的背景に見合った日本独自の視点を取るようにした。

三つ目は西洋での東洋学は帝国主義政策とのしがらみから生まれたものであるというふうにとらえた。つまり西洋によって紹介されたアラブ・イスラムの社会像が必ずしも正確なものではないというのである。そのために西洋の学者の諸著書に頼らず、アラブ・イスラム諸国のネイティブの学者の経験を参照しながらできるだけ原文を取り上げるようにした。

アラブ諸国における現状への研究関心が増えつつあったにも関わらず、日本国内の大学、たとえば東京・慶應・京都大学の東洋研究科に設定された根本的なイスラム研究には変化がなく、設立当時とほぼ変わらない取り組み方であった。

#### 参考文献：

- ハッサン・カーメル、「日本とアラブの交流史・両者の相互理解に関する試論」、名古屋大学学術機関リポジトリ、71-86 頁
- 杉田英明、『日本人の中東発見』、東京大学出版会、1995 年
- 「現代アジアへの視点」、歴史学研究会、青木書店、1985 年
- 中村覚（なかむら・さとる）、『サウジアラビアを知るための 65 章』、明石書店、2007 年
- 大塚和夫、『現代アラブ・ムスリム世界』、世界思想社、2002 年
- 酒井啓子、『中東から世界が見える』、岩波ジュニア新書、2014 年
- 長岡慎介、「現代中東アラブ世界の読み」、『情報の科学と技術』66 巻・1 号、2016 年
- 桑原亮（くわばら・まこと）、「アラブの習慣“インシャーラー”精神への戸惑いから学ぶ」、国際協力銀行広報誌、6 月 2017 年
- 「Arab-Japanese Relations」, Japan National Committee for Study of Arab Japanese Relations, Tokyo Symposium, 1980
- Arab Japanese Relations, Japan National Committee for Study of Arab Japanese Relations, Mishima Symposium, 1982
- 中谷武世、『アラブと日本—日本アラブ交流史』、原書房、1983 年
- 『アラビア太郎の勝負—山下太郎—』、三好徹、読売新聞社、1975 年